
リライト ~ 紅く染まった花 ~

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リライト ～紅く染まった花～

【Nコード】

N3031Y

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

全ては、あの日から始まった…!!
ある夜、銀時は過去の夢を見る。
その翌日、桂からある妖刀の話聞いた。
その妖刀を手にしたのは……。

第0話 全てのはじまり

ただ、刀を振るった。

『奴』が、先生の敵だと分かって。

高杉は、左目をやられているのに、向かって行った。

だが、あっという間に斬り伏せられ、とどめをさされそうになる。

『奴』は不気味に笑いながら、高杉に剣を振り下ろした。

嫌だ、死なせたたくない。

もうこれ以上、誰かが死ぬのは見たくない。

声にならない叫びを上げ、俺は『奴』に飛びかかった。

気が付くと、『奴』の姿はなかった。

何があつたのか覚えていない。

微かに覚えているのは、自我が飛んだ瞬間と、一瞬だけ聞こえた俺を呼ぶ声。

視界の端にいた刹那に目をやる。

一目で、刹那の感情が分かった。

戸惑い、驚き、不安、心配、恐怖……。
考えつく感情は幾つもあったが、恐らく、最後の感情が一番強いだ
ろう。

俺が、『あれ』になった姿は……。

第1話 警告する悪夢（前書き）

なんか、『次元を征く者』の2話に似てしまった……。

第1話 警告する悪夢

「……っ!」

銀時は起き上がる。

時刻は深夜、夜明けまで何時間もおる。

「夢か……」

全身から汗が噴き出し、息が上がっていた。

(なんで…今更……)

頭を押さえ、先程の夢のことを考える。

数年前、それも、戦争の時の夢を、何故今頃見たのか……。

「……」

寝ていたリビングのソファから降りると、窓の近くに行き、月を見上げる。

(あの時と同じ月……か)

一息つき、背を向けるとソファに戻ると、横になって目を閉じた。

「……」

気付くと、見渡す限り、真っ暗な闇の中にいた。

辺りを見回す。

何も見えないが、そこがどこなのかは分かっていた。

(久々…だな)

この場に来た回数は少ない。

だが、妙に懐かしく感じる……。

そう思っていると、背後に気配を感じた。

さっきの夢を見て、俺がここにいるということの意味が大体分かった。

「警告でも、しに来たのか……？」

ゆっくりと振り返ると、少し離れた所に、『あいつ』が立っていた。

第1話 警告する悪夢（後書き）

内輪ネタを入れていこうかな。
ギャグで。

第2話 静寂な朝（前書き）

『月の残像』に登場した、月原白哉つきはらびやくやを約半年振りに出しました。

及川刹那もおいかわせつな『月の残像』の設定で登場します。

第2話 静寂な朝

「おはようございまーす」

玄関からする新八の声に、銀時はほんやりと目を覚ます。

(朝か…)

起き上がり、窓の外を見ると、朝陽が差し込んでいる。

「あ、銀さん。やっぱり、ここで寝てたんですね」

「ああ、白哉が移すといけねーから、ってな」

昨日から風邪をひいている白哉は、銀時に移したくないと言っていた。

その為、銀時はソファで寝ていた。

「俺は白哉のお粥作るから、おまえは朝飯作れ」

「は！？一緒に作ればいいじゃないですか！！」

文句を言う新八を無視して、銀時は台所に向かった。

「まったく……」

新八は、呆れながらため息をつく、押し入れに声を掛ける。

「神楽ちゃん、起きて。朝だよ！」

「うっ、あと5時間……」

「どんだけ寝るつもりだ!!」

大声でツッコんでいると、和室から、寝巻き姿の白哉が出てくる。

「あ、月原さん！」

「びゃっくん、起きてて大丈夫アルか？」

「熱は下がった。元々俺は、風邪ひいてもすぐ治るんだよ」

そう言って、白哉はソファに座る。

「でも、バニラが作った薬もあったから、すぐに治ったネ」

「まあな……」

答えてから、何かを考え込む。

「どうしたんですか？」

「銀時が…何か言ってなかったか？」

「何かって？」

「夜中に、何かブツブツ言ってたんだよ。寝言かもしれないけどな」

「どんなこと言ってたアルか？」

「違つとか、俺はずつといる……とか言ってたな」

「なんですか？それ……」

「俺も意味が分かんねエけど……」

「白哉の奴、聞いてたか……」

気配を消し、あいつらに聞こえないように、俺は呟く。

『中』での会話は、寝言のように口にしていたらしい。

(断片的なら、伝わらねーか……)

頭を掻き、台所に戻る。

『あいつ』は、警告こそしなかったが、ずつといると言っていた。俺の『中』で……。

第2話 静寂な朝（後書き）

『月の残像』の続編っぽいけど、続編ではありません。

第3話 辻斬りと妖刀

朝食の後は、特にすることがなく、全員だらけていた。

「暇アル…」

「依頼こないですかね…」

「銀時、いるか!?!」

戸を開ける音と共に、桂の声が聞こえた。

「あ、桂さんが来ましたよ」

「ヅラかよ………」

銀時は舌打ちをする。

桂はリビングに入り、ソファに座った。

「勝手に入ってきて、勝手に座らないでくれる?」

「別にいいではないか。それより、最近辻斬りが出るのを知っているか?」

「ああ………」

数日前から辻斬りが現れ、被害に遭った者は何人もいると言つ。

「確か、出逢った奴らは、みんな殺られてるって聞いたけど」
話を聞いていた白哉は、呟くように言う。

「そつだ。出逢った者は皆、な……」

「辻斬りの特徴とかは無いんですか？」

新八が訊くと、桂は「特徴か……」と呟いた。

「すまんが分からん。ただ、その辻斬りが持っているらしい刀のこ
とは聞いた」

「どんな刀ネ？」

「とどめを刺す時、刀の刀身が、赤黒く光るらしい……」

「赤黒く光るう？何だよ、それ」

特徴を聞き、白哉は肩をすくめる。

「まさか、紅桜みてーな機械からくり刀なんじゃねエのか？」

「だったら、大事じゃないですか！」

紅桜を連想した銀時に、新八は不安げに言う。

「……ひがなばな」

「え？」

特徴を話した後、何かを考えていた桂は、ぽつりと言った。

「この名に、聞き覚えは無いか？」

「それって、9月頃に田んぼとかに咲いてる花のことですか？」

「いや、花の名前ではない。……刀の名だ」

「その刀が、どうしたんだ？」

「それは…、妖刀と言われている刀だ」

少し間を空けた後に言い、桂は続けた。

「ひがんばん花は、魂を喰らうと言われている。斬られれば、たちどころに死に至るらしい……」

桂は説明しながら、紙に緋願花の字を書く。

「これで『ひがんばん』って読むのか……」

「字だけを見ると、妖刀とは思えませんね」

「他にも、『魂喰い』、『死を呼ぶ不吉』など、様々な呼び名がある」

説明を終えると、桂は立ち上がった。

「もし仮に、辻斬りが緋願花を持っていたら、とにかく逃げろ。そ

の刀には、何かある」

「珍しいな。おまえがそこまで言うの」

いつになく真面目な桂に、銀時は少し驚く。

「以前、その刀の名を、どこかで聞いたことがあってな。どこだったか思い出せんが……」

「わーったよ。とりあえず氣イ付ける」

銀時は手をヒラヒラ動かしながら答え、桂はそれを見てから出て行った。

第3話 辻斬りと妖刀（後書き）

緋願花の名前は、BLEACHのゲームに登場する斬魄刀から取りました。

また、『魂喰い』と『死を呼ぶ不吉』はガンガンに掲載されている2つの漫画の中から取りました。

第4話 紅い花

「本当に、そんな妖刀あるのか…？」

桂が帰った後、白哉は頼杖をしながら呟く。
口調から、半信半疑のようだ。

「でも、妖刀があってもなくても、辻斬りには気を付けた方がいいですね」

「そうアル。今までにも、辻斬りにはとんでもない奴が沢山いたネ」
すると、銀時は立ち上がり、玄関に向かう。

「あれ？銀さん、どこ行くんですか？」

「ちょっとパチンコ」

「は！？こんな時に、何言ってるんですか！！」

新八は叫ぶが、銀時は出て行く。

「あの天パー、危機感とかねーのか!？」

「俺もどっか行ってこよ」

苛立つ新八を無視して、白哉も外に行こうとする。

「びゃっくんは駄目ネ！風邪がちゃんと治ってないのに、外出たら、また熱出すアルー！」

「もう治ってるって！平気だよー！」

「駄目ですよ。今日1日は、外出しないで下さい！」

「しょうがねエな……」

ため息を付くと、白哉はふてくされながら、外に行くことを諦めた。

「緋願花ね……」

銀時は歩きながら、桂から聞いた妖刀の名を口にした。

(よりによって、あの花と同じ名前とは……)

そう思いながら、同じ名の花を思い浮かべる。

彼岸花には、思い入れがあった。

幼い頃、銀時が松陽に拾われて間もない時、河原で紅い花が幾つも咲いているのを見つけた。

「真っ赤だ……」

銀時は先の丸まった紅い花を、じっと見た。

「それは彼岸花と言う花ですよ」

「ひがんばな？」

松陽が隣に立って言い、銀時は振り返って訊く。

「縁起が悪い花とも言われていますが、とても綺麗な花でしょう？」

「うん…」

再び花を見つめ、触れてみる。

花は、僅かに揺れた。

「彼岸花は真っ赤な色が多いのですが、白い彼岸花もあるそうです」

「白いのも？」

「ええ。白い彼岸花は、きっと銀時の髪のように綺麗なんでしょうね」

ずっと昔に話したことが、鮮明に甦る。

「汚しやがって…」

表記こそ違えど、同じ『ひがんばな』と言う名前に、銀時は嫌悪感を抱いた。

「……とりあえず、あそこに行ってみるか」

呟くと、銀時はある場所に向かった。

第5話 妖刀の起源（前書き）

小説のタイトルを変えました。

第5話 妖刀の起源

銀時はある場所：鍛冶屋に來ると、中に入った。

「おい、いるかア〜？」

「銀さん！」

刀を打つ手を止め、鉄子は振り返った。

「久しぶり。今日はどうしたの？」

「ああ、ちょっと訊きてエことがあんだけど」

銀時は、桂の話していた緋願花のことを大まかに言った。

「緋願花か……」

「何か知らねーか？」

「ちょっと待っててくれるか？」

鉄子は部屋の奥に入って行く。

「お待たせ」

数十分程待たされ、鉄子は古そうな本を持って戻って來た。

「何か分かったか？」

「うん…。かなり昔に打たれた刀みたいで、信憑性に欠けるが……」
そう話しながら、鉄子は本のページをめくる。

「緋願花には、対となる刀があるらしい」

「対となる刀ア？それも妖刀か？」

「前にも言ったけど、妖刀の話自体は眉唾ものだ。元々の緋願花は、妖刀ではなく、神器だったと書いてある」

本には、二振りの刀の絵が描かれている。

「緋願花と対をなす刀の名は、『きんせんか琴扇花』と言うらしい……」

「きんせんか？また花の名前か…。で、その刀は、今どこにあんだ？」

「残念だが、その刀はもう存在しない。熔岩に落ちて、消失したとある」

「もう無エのか……」

銀時は頭を掻き、座り直した。

「緋願花の刀身は、紅緋色。琴扇花は朽葉色だと言う。抜群の切れ味と、美しさを兼ね揃えた神器が、何故妖刀などと呼ばれるように

なつたかは分からない」

だが、と鉄子は続けた。

「神器が本当に妖刀になったとしたら、一度魂を喰われれば、元に戻ることは無いかもしれない」

「……そうか」

呟くと、銀時は立ち上がった。

「いろいろありがとな」

「…銀さん」

出掛けに鉄子が呼びかけ、銀時は振り返った。

「もし本当に、緋願花に出逢ったら、無理だけはしないでくれ…！」

「ああ…」

軽く返事をし、鍛冶屋を後にした。

第6話 夕暮れの空

万事屋を出た桂は、人通りの少ない道を歩きながら、辻斬りのことを考えた。

『桂さん』

前方から、エリザベスが来て、プラカードを見せる。

「ん？エリザベスか」

『万事屋に行ってたんですか？』

「ああ。伝えることは伝えた。後は、あいつらにも言わんとな……」
そう言った時だった。

「かゝつらアアツ！！」

爆音と共に、真選組隊士を引き連れた沖田が現れ、こちらにやって来る。

「真選組……！逃げるぞ、エリザベス……！」

『はい！』

桂はエリザベスと共に、路地裏に逃げ込む。

「やれやれ、やっと撒いたか……」

真選組から逃げ回り、桂はようやく安堵する。

「さて、あいつらの所に行くか。エリザベス、おまえは先に帰っている」

『分かりました』

去って行くエリザベスを見送り、桂は、ある橋の上に行く。

「遅かったな」

橋の上には、笠を被った高杉と、普段の服装の刹那がいた。

「ああ、真選組に追われていた」

「…で、何の用だ？」

鼻で笑った後、高杉が訊いた。

「昼間、銀時に言ったんだが…」

桂は2人に、緋願花のことを話した。

「緋願花か……」

「聞き覚えは無いか？」

「無エな」

「前に…本か何かで、見たことあるかも…」

「本当か？」

刹那は、やや曖昧に頷いた。

「結構前に見たから、確証は無いけど…。確か斬られた人は、ずっと眠り続けて目を覚まさない…だったかな」

「死ぬんじゃないのか？」

「いや、死ぬまで目を覚まさない、ということじゃないか？別名が、『魂喰い』や『死を呼ぶ不吉』と言う位だからな」

「そんな刀を、辻斬りが持つてるかもしれないのね…」

ぽつりと刹那が呟き、桂は空を見上げた。

「緋願花には関わらない…いや、出来れば出逢いたくないものだな」

「ツラ、おまえが真っ先に出逢いそうだけだな」

これまでのことを思い出し、高杉はニヤリと笑った。

「貴様…っ！気にしていることを…！」

「ま、せいぜい気イ付けるよ」

「私達も気を付けるね」

高杉と刹那は、踵を返すと去って行った。

「妖刀って、本当にあるのかな……。あ、忘れてた」

刹那は立ち止まり、書簡を差し出す。

「これ、今日の夜襲撃する料亭の見取り図と配置」

「ああ……」

高杉は書簡を受け取り、軽く中に目を通すと、懐にしまつ。

「毎回悪イな。おまえの千里眼に頼っちまって」

「別にいいよ。目的は一緒なんだし」

薄く笑って言うが、何かの気配を感じ、辺りを見る。

「どうした？」

「今……、変な気配がした……」

「真選組か？」

「違う。何か、禍々しいものが……」

辺りに見えるのは、夕暮れの景色と少ない人影。

怪しいものは見当たらない。

「千里眼でも見えねエか？」

「……見えない」

目を閉じてあちこちを向くが、変わったものは見えなかった。

「あれ……？ 気配が消えた」

「消えた？」

「うん……。突然消えた」

不穏な空気になったが、2人はそこで別れた。

第6話 夕暮れの空（後書き）

刹那の千里眼…。

いづれ説明します。

これまでの小説を見ていれば、何かすぐに解ると思われませんが……。

第7話 闇に光る刀

「帰って来ないな。銀時の奴…」

窓の外を見ながら、白哉が言った。

銀時が出て行ってから、数時間が経ち、外はすっかり暗くなっていく。

「どこで寄り道してるネ…」

ソファで寝転びながら神楽は言うが、その様子は落ち着きが無い。

「近くを見てきた方がいいかな…」

「辻斬りが出るって言うてんのに、危険じゃないか？」

「なら、ちよつと行って来るネ！」

新八と白哉の話の聞き、神楽は外に飛び出して行く。

「おい、神楽！」

「僕が行きます。月原さんは、銀さんが帰って来るかもしれないんで、残ってて下さい！」

新八も木刀を手に取ると、外に飛び出した。

白哉は1人、部屋に残される。

「置いてかれた…」

ぽつりと呟く。

尤も、風邪が完治していない為、どの道白哉は留守番になっていたのだが……。

万事屋を出た新八と神楽は、夜の街を歩く。

「銀さん、どこ行ったんだろう…」

「どうせどっかで、金玉なり銀玉なり転がして」

そこまで言っつて、神楽は急に立ち止まる。

「どうしたの？神楽ちゃん」

「あっち……」

暗い路地を指差す。

神楽の指を見ると、震えていた。

「あっちから……血の臭いがするアル」

「血の臭い……!?!」

新八は驚き、路地を見つめた。

「…私、行ってみるネ」

「え!？」

「辻斬りかもしれないアル」

「駄目だ、危ないよ!桂さんの言ってた話が本当だったら…!」

「でも…っ!何が起きてるか気になるネ!それに…」

神楽がその先に、何が言いたいか分かった。

「…確かに、僕も気になる。でも、銀さんじゃない!」

はつきりと言い、神楽を見た。

「行こう。辻斬りが、もし緋願花を持っていたら、その時はすぐ逃げよう!」

「分かったネ!」

2人は路地に入り、臭いを辿って行く。

やがて、街頭の殆ど無い、裏通りに出る。

「この近くからするネ…」

辺りには、濃い血の臭いが広がっている。

「うん…。でも、誰もいないよ」

血の臭いはするが、周りに人や死体は無く、血の一滴も落ちていな

い。

「こんな時間に、ガキがうろついているとはな……」

突然、辺りに低い声が響いた。

「誰だ!？」

「姿を見せるアル!」

その時、神楽は見た。

闇の中でも、銀色に光る刀が、新八に振り下ろされようとしているのを。

第8話 滲み出る殺気

「新八、逃げるアル!!」

神楽が叫ぶと、新八は、自分に向かって刀が振り下ろされていることに気付く。

「うわアアツ!!」

(駄目だ、間に合わない…!!)

そう思った時だった。

ガキインツ!!

高い金属音がし、見てみると、木刀で相手の刀を押さえる銀時がいた。

「銀さん!」

「銀ちゃん!」

「何やってんだよ、おめーらは」

相手の刀を押し返し、銀時は2人を一瞥する。

「銀ちゃんを捜しに来たネ!なかなか帰って来ないから…」

「そうかよ…」

呟き、相手を見据える。

辺りが暗い為、顔が見えない。

「ガキ相手に、しかも、武器も構えてねー奴を襲ったア、汚エヤロ
ーだな」

相手は黙っている。

銀時は舌打ちし、構わず続けた。

「……てめーが、辻斬りか？」

「……」

「おい、聞いてんのか!？」

声を荒げると、相手は不気味に笑った。

「……っ!」

笑い声を聞き、新八と神楽は、思わず後退る。

「……久しぶりだな」

声からして、相手は男のようだ。

銀時は声を聞いて、目を見開いた。

(こいつ…、まさか…!)

声を聞き、様々な光景が頭をよぎる。

「銀ちゃん…?」

「どうしたん…ですか…!?!」

銀時の様子を見て、新八と神楽は声を掛ける。
が、銀時は答えず、木刀を握り締めている。

「また遭えるとは思わなかったぞ。……白夜叉」

その瞬間、銀時は駆け出し、木刀を振り下ろす。

「銀さん!?!」

殺気立った目で、激しく木刀を振るう銀時に、2人は呆然と見つめる。

「てめエの…、てめエのせいで…っ!!」

「あいつ…、銀ちゃんに何かしたアルか…?」

銀時の発言に、神楽は呟いた。

「分からない。でも、あんな銀さん…見たこと無い……」

2人は、激しく戦う銀時と男を見つめることしか出来なかった。

第8話 滲み出る殺気（後書き）

この後の展開どうしよう……。。

第9話 黒き夜叉（前書き）

やっと煉獄姫の刹那が書けた…！！

タイトル通り、例のあの人が出ます。

……ハリポタか。

第9話 黒き夜叉

銀時と男の戦いはしばらく続き、辺りには刀と木刀のぶつかり合う音が響く。

「銀さん…！」

「新八、あいつ…ヤバいアル……」

震える声で、神楽はぼつりと言った。

「あいつ…、強さだけじゃないネ。何か…恐ろしい感じがするアル……」

「うん…。僕もそう思う…」

相手の強さは勿論、よく見えないが、容姿や持っている刀にも、不気味な気配がしていた。

「はっ…はっ……」

呼吸を荒くし、銀時は後ろに下がる。

「おかしいな…。おまえ、こんなに弱かったか？」

男は挑発するように言い、銀時を見る。

「左目を潰した男にとどめを刺そうとした時、飛びかかって来たお

まえの方が」

「うるせエエツ!!」

木刀を握り締め、再び男に飛びかかる。

男は刀で木刀を受け止める。

「つまらんな。あの白夜叉が、ここまで弱かったとは……」

木刀を弾いた時、男の持っていた刀が、不気味に赤黒く光った。

「刀が……!!」

「てめエ、まさかその刀は……!!」

「知っているのか?この『緋願花』を」

間髪入れずに、男は緋願花を振り下ろした。

「くっ……!!」

銀時は咄嗟に避けるが、髪が少し切れた。

「てめーが、緋願花を持ってたのか……!!」

「銀ちゃん、逃げるネ!」

「そうですよ!桂さんも言ってたでしょ!?辻斬りが緋願花を持っていたら逃げろって……!!」

「……逃げんなら、おまえらだけで逃げる」

2人の顔を見ずに、銀時は言った。
その声は冷たかった。

「何言ってるんですか!!」

「一緒に逃げるアル!」

新八と神楽は叫ぶが、銀時は聞かずに、男に向かって行く。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

再び銀時は、男と……いや、緋願花と打ち合う。

「銀さん……、何であそこまで……」

激しく打ち合う銀時の姿を見て、新八は呆然と呟く。

紙一重で銀時は緋願花を防ぐが、次第に押されて行った。

バキィッ

木刀が砕け、粉々に砕け散った。

「死ね」

低い声と共に、赤黒く光る刃が、銀時の首筋から脇腹を斜めに斬り裂いた。

「ぎっ…!!」

血が吹き出し、銀時はその場に倒れた。

(声が…出ない)

(足が…身体が動かない)

信じ難い状況に、新八と神楽は、その場を動くことが出来ない。

男はとどめを刺すかのように、銀時の首に向かって、緋願花を振り下ろした。

「や…、やめろオオオツ!!」

なすすべも無く、2人が叫んだ時、刀同士がぶつかる音が響いた。

「リーダー、新八くん、大丈夫か!？」

振り返ると、そこには桂がいた。

「桂さん!」

男の方に目をやると、刹那が刀で緋願花を防いでいた。

「バナナ…!!」

服装はいつもと違い、赤くやや丈の短い着物に、白い襟巻きで口元を隠し、髪を赤い紐でポニーテール状にした、煉獄姫の出で立ちだ。

「そこをどけ、小娘」

「断るわ」

「てめエの相手は、俺だ…！」

男の背後から、高杉が斬り掛かる。

「ふん…」

刹那を突き飛ばし、高杉と刀を交えた。

「あの時の奴か…」

「搜したぜエ、『黒夜叉』…！！」

憎悪と怒りのこもった声で、高杉は男を呼んだ。

「黒…夜叉…？」

新八は驚きながら呟く。

その間に刹那は、銀時の止血をし、桂の近くに行く。

「銀ちゃん！！」

「銀時！おい、しっかりしろ…！」

止血は出来たが、銀時は微動だにしない。

「無駄だ。そいつは、もう死んでいる。緋願花に喰われてな」

「てめエ…!!」

黒夜又は高杉の刀を押し返すと、その場から立ち去った。

「待て!!」

「高杉、今は銀時だ!」

「銀ちゃん、早く起きるネ!」

「しっかりして下さい!!」

「大丈夫。まだ、息がある」

刹那は呼吸を確かめた。

が、虫の息に近く、危険な状態だった。

「すぐ万事屋に行くぞ!」

桂は銀時を背負い、全員万事屋に向けて走った。

第10話 困惑の夜（前書き）

2日連続投稿！
いつ以来だ？

第10話 困惑の夜

先に寝ていた白哉は、玄関の戸を叩く音に目を覚ました。

「ん…？銀時達か？」

眠そうにしながら起き上がると、神楽の声が聞こえた。

「びゃつくん！早く開けるネ！！」

「銀さんが大変なんです！！」

「は！？」

白哉は驚き、玄関に向かうと、戸を開けた。

そこには、血だらけの銀時を背負った桂と、新八と神楽、高杉と刹那がいた。

「銀時…！？おい、何があっただよ！！」

「話は後だ。上がるぞ！」

桂達は急ぎ、銀時の手当てをし寝かせた。

「大丈夫なのか、銀時は！？」

不安感から白哉は、桂達に詰め寄った。

「……………」

「おい、なんとか言えよ!!」

「銀時は…、緋願花に斬られた…!」

「なに……………」

白哉は目を見開き、寝かされている銀時を見る。

「大丈夫。銀時さんは、死んでないよ」

刹那は、口元を覆っていた襟巻きを下げ、いたわるように言った。

「傷がかなり深い。目を覚ますには、時間が掛かるだろう」

浅く呼吸する銀時を、桂は一瞥した。

「……………あの、訊いてもいいですか?」

黙っていた新八は、思い切って訊いた。

「さっきの黒夜又って…、誰なんですか!?!」

「そうアル!黒夜又だか影夜又だか知らないけど、銀ちゃん、あいつを殺そうとしてたネ!!」

「…神楽ちゃん。影夜又は、この小説書いてる人だから……………」

「……………奴のことを話すとすると、かなり長くなる」

腕を組み、桂は呟いた。

高杉と刹那も、険しい表情をしている。

「おまえらには、自分の過去とか話してねエんだろ？」

高杉が訊くと、新八と神楽は頷き、白哉も曖昧に頷く。

「白哉くんからだど、銀時さんと別れた後になるわね…」

「この話は、日が登ってから話す。今は休んだ方がいい」

桂が提案した。

確かに今の時間帯は遅く、話を聞いても、よく分からないかもしれない。

「そう…ですね。じゃあ明日、話して下さい」

桂達は帰って行き、3人は銀時を見た。

「何があったアルか？銀ちゃん…」

「桂さん達共、関係してるみたいだし……」

「銀時は、俺と別れた後のことをろくに話さなかった。まるで、話したくないみたいに」

明日…いや、今日の朝に、銀時の過去に触れることに、3人は戸惑いと不安を覚えた。

第10話 困惑の夜（後書き）

内輪ネタは、これからも出すか…。

第11話 目覚め(前書き)

23歳になりました。

カイジを観て来たので、テンションが上がってます…!!

第11話 目覚め

次の朝、万事屋に泊まった新八は、いつもより早めに起きた。

「あ、新八起きたネ」

見ると、神楽が先に起きていた。

「神楽ちゃん！早いね」

「私より、びゃっくんの方が早かったアル」

白哉は朝食を作っているのか、台所から音が聞こえる。

「……じゃあ、僕が一番最後ってことか」

ぼやいた後、新八は銀時の様子を見してみる。
相変わらず呼吸は浅く、目を覚ます気配は無い。

「銀さん……」

「新八、飯出来たぞ」

後ろで白哉が声を掛け、同じように銀時を見つめた。

「早く起きろよ、銀時……！」

白哉が手に握り締めた時、玄関から声がした。

「おはようございます」

「！及川さんだ」

部屋の外から、神楽と刹那の話し声が聞こえた。

「早いアルナ、バナナ」

「新八さんと白哉くんは、あっちにいるの？」

「ウン」

「じゃあ、私も行くね」

髪を下ろし、橙色の着物を着た刹那が、和室に入って来る。
桂達の姿が見えないところを見ると、1人で来たようだ。

「薬持って来たんだけど…。今使っていい？」

「あ…、いいですよ」

「その薬、おまえが作ったのか？」

「そうだよ。昨日帰って、すぐ作ったの」

刹那は、薬の入った瓶を取り出す。

「ところで、今朝ご飯なんでしょ？薬は私が塗っとくから、食べていいよ」

「え？でも…」

「いいから、銀時さんは私が看てる」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて。月原さん、食べましょう」

新八と白哉はリビングに行き、刹那は瓶を開けて、薬を塗り始める。

（首筋にかけての傷が、やっぱり深い……）

振り返り、新八達の様子を見る。

（見てない。今なら……）

刹那は銀時の傷に、両手を翳した。
すると、白い光が輝く。

（これで、『傷』は治る）

自身の持つ癒やし力を見られたくない為、手早く行った。
ある程度治した時、銀時が呻き声に違い声を上げた。

「銀時さん……？」

「刹那、どうした!？」

すぐに白哉がやって来て、新八と神楽も近くに来る。

「今、銀時さんが……」

指を差すと、銀時はうつすらと目を開けた。

「銀ちゃん!!」

「気が付いたんですね!」

銀時は答えず、目線だけで辺りを見ると、刹那と目が合った。

「……め」

「え?」

「何か言ったアルか?」

かすれた声で、銀時は再び言う。

「久し…ぶりだな。煉獄…姫」

第11話 目覚め（後書き）

過去の話は、次の次位に書きます。

第12話 現れた者

「え……。銀さん、何言ってるんですか？」

「そうネ。いつもバナラのこと名前で呼んでるのに……」

新八と神楽は困惑し、刹那は僅かに目を見開く。

「大丈夫か？刹那のこと分かってるか？」

白哉が訊くと、銀時は新八と神楽、白哉の顔を順に見ると、呟くように言った。

「誰……。？おまえら」

「……え？」

沈黙が流れ、3人は銀時の顔をじっと見る。

「誰って、何言ってるんだよ」

「私達のこと……分からないアルか？」

「……分からないじゃねエよ。俺は、おまえらのことは知らねエ」

動揺する白哉達に銀時ははっきりと言い、刹那を除く3人は、その言葉に衝撃を受けた。

「あなた…やっぱり」

ぽつりと刹那は呟く。

その声は低く、煉獄姫としての口調だった。

「やっぱりって、何ですか？」

「どういうことだ、刹那！」

白哉と新八は詰め寄るが、刹那は答えない。

「悪いが、もう少し寝かせてくれ。まだ、身体が…」

言葉の途中で銀時は目を閉じ、再び眠った。

「また寝ちゃったアル…」

「及川さん、何か知ってるんでしょう！？教えてください！」

「…これは、私1人だと説明出来ないわ」

息をつき、刹那は頭に手をやった。

すると、玄関の戸を開ける音が聞こえた。

「桂さんと高杉さんかな」

「ちょっと、話してくるね」

そう言って刹那は立ち上がると、玄関に向かった。

「バナラ達、何話してるアルか？」

廊下から話し声があるが、小声の為よく聞こえない。
しばらくすると、刹那は桂、高杉と一緒に戻ってくる。

「昨日言ってたこと、これから話すね」

「とりあえず、こっちに集まってくれ」

桂達は3人をリビングに集め、静かに和室の襖を閉めた。

「刹那から話は聞いた。…話すことが多くなってしまったな」

「それも、ちと厄介なことだ…」

煙管を加え、高杉がぼやく。

どうやら、この3人も困惑しているようだ。

「どこから話そうか……」

「全部だ」

考える刹那に、白哉はすぐに言った。

新八と神楽も頷いた。

「知ってること、全部話してくれ」

「…分かった。全部話すね」

「あと…。銀ちゃん、今どうなってるアルか？」

「僕達のことを知らないって言ってたし、まさか…記憶が消えて」
「それは無いよ」

刹那は、新八の言葉を遮った。

「知らないって言ったのは、言葉通りの意味。あの人は、あなた達のことが分からないんじゃないかって、知らないの」

「え…？」

「よく分かんないネ」

「『あの人』って、何で他人みたいに言ってるんだ？」

銀時の名を言わず、『あの人』と言った刹那に、白哉は疑問を持つ。

「あの人は…銀時さんじゃない」

「え!？」

「銀時じゃないって…じゃあ、誰だよ!？」

「あれは…」

「白夜叉だ」

刹那に代わって、高杉が言う。

「白夜又って、戦争の時の銀さんの異名ですよね……」

「何でその名前が出てくるんだよ」

その名前が何故出てくるのか、全く分からなかった。

「戦争の時、ある出来事があったの。その際に……」

「あいつが、二重人格だと分かった」

「二重人格!？」

高杉の発言に、3人は驚く。

そんな3人を見ながら、桂が続けた。

「最初から二重人格だった訳ではない。原因は、あの戦。そして、戦に参加するきっかけになったのは、『あの日』だ」

第12話 現れた者（後書き）

次回から、ツラ達が語る過去です。

すべて捏造、やや無理な描写があると思いますが……。

第13話 出逢いと始まり（前書き）

携帯の修理と過去の話を考えて、かなり遅れてしまいました……。過去の話は、楽曲をモチーフに書いていきます。

第13話 出逢いと始まり

桂達は、自分達の過去を話し始めた。

「俺達が幼なじみだということは、銀時から聞いているだろう？」

「あ、はい…。聞いてます」

「出逢った場所は、ある私塾。でも、最初から一緒に学んでた訳じゃないの」

「どづいつことアルか？」

「銀時と刹那は、後から来た。俺とヅラが通い出して、半年後に銀時が、その更に半年後に、刹那が来た」

(変わった奴が来た…)

それが、初めて銀時の姿を見た桂と高杉の印象だった。

「鬼だ…」

「化け物!？」

だが、他の子供達は、小声で口々に言い合った。畏れや、恐怖の混じった奇異の目を向けて。

「……」

銀時は黙って、松陽に渡された教本と刀を持って、窓際の一番後ろの席に座った。

「静かに。では、昨日の続きから始めます」

松陽が授業を始めると、子供達は話すことは止めたが、ちらちらと銀時を見る者が多くいた。

その日の授業が終わり、他のみんなが帰って行くと、銀時は刀を持って外に出て行った。

「あいつ、どこ行くんた？」

「追っぞー！」

高杉はあまり気にしていなかったが、俺は後を追った。

「おい、ツラー！」

走り出した俺を見て、高杉もついて来る。

俺は肩越しに振り返って叫ぶ。

「ツラじゃない、桂だ！」

外に飛び出すと、銀時は学舎に背を向けて歩いて行くのが見えた。

「どこに行くんだ、銀時！」

俺が呼び止めると、銀時は立ち止まって、俺と高杉を見た。

「やっぱり、俺はここにはいられない」

消え入りそうな声で、ぼつりと言った。

「あそこ戦場に戻る」

振り返ると、再び歩き出した。

「待てって!!」

「行くんですか?」

何時の間にもやって来たのか、俺と高杉の隣に松陽先生がいた。

「先生!」

先生に言われ、銀時は振り返らずに立ち止まった。

「戻りたいのなら、止めません」

「先生!??」

「戻る気は…しない」

銀時は、少し俯いて答える。

さっき言ったことと、矛盾している。

「あいつらも、今までの奴らと同じこと言った」

「今までの奴ら…?」

それを聞いて、他の子供達が『鬼』や『化け物』、と言ったことを思い出す。

「あいつ…。今までずっと、そう呼ばれてきたのか…」

高杉が呟く。

俺も同じことを考えていて、袴の裾を握った。

「それは、あくまで見た目だけの話です。銀時の自分らしさを見せれば、みんな、そうは呼ばなくなります」

「自分らしさ?」

銀時は振り返り、先生の顔を見た。

「そんなの…分かんない」

「そうですね。自分らしさなんて、誰も分からないかもしれません」

先生は微笑み、穏やかに続けた。

「すぐには無理かもしれませんが、ですがそれは、長い長い人生の途中で、見つけられる筈です」

「……でも」

銀時の声が、少し震えていた。

「俺でも…、見つけられる…?」

「ええ。見つけて、もし失くしても、拾うことができます。だから、強がらなくてもいいんですよ」

「強がる…?」

その言葉に、俺と高杉は先生を見上げた。

「『鬼』や『化け物』などと呼ばれて、平気な人はいません。今まで、我慢してきたのでしょうか?」

銀時は俯き、肩を震わせる。

それが泣いているのだと、すぐに分かった。

「それから、少しずつだが、銀時は俺達と打ち解けていった」

桂は、銀時が初めてやって来たことを話した。

「銀ちゃん…、ずっとそんな風に呼ばれてきたアルか」

「俺と一緒にいた頃から、何も変わってなかったのか…」

離れ離れになる前と変わらない扱いを受けていたことを知り、白哉はつらそうに呟いた。

「最初の頃、あいつは他人に無関心だったが、ある時、1人の少女

を見つけた」

「少女？」

「誰ですか？」

「私だよ」

刹那は静かに言った。

そのことに、新八達は不思議そうな顔をする。

「見つけたって、どういう意味ですか？」

「さつき、晋助さんが言ったたでしょ？銀時さんが来た半年後に、私
が来たって。私は、私塾の近くで倒れていたの」

「おい、誰か倒れてるぞ！」

近くの川で遊んだ帰りに、銀時が叫んだ。
見ると、橙色の着物を着た、ツラと同じ位の長さの黒髪の少女が倒
れていた。

「しっかりしろ！」

近くに行き、ツラは少女を抱き起こす。

「気を失ってるだけみたいだ」

少女は見たところ、俺達より少し年下のようだ。

「先生の所に連れて行こう！」

俺が言うと銀時は頷き、ツラは少女を背負った。

少女を私塾に連れて行き、部屋で寝かせた後、俺達は廊下に出て少女を見つけた際のことを先生に話した。

「怪我などはしていませんから、しばらくしたら目を覚ますでしょう」

「あの子、どこから来たんだろう……」

ツラが、少女を寝かせた部屋を見た時、小さな声が聞こえた。

「起きたのかな？」

ツラと銀時は、部屋に入って行った。

「晋助、あの子にお茶を出すので、手伝ってくださいませんか？」

「はいっ！」

部屋に入る前に言われ、俺は返事をした。

「先生ーっ、あいつ目え覚ましたよーっ！」

銀時の声が廊下に響く。

少しづつるさい。

「衰弱してしまいましたから、何も食べていなかったんだと思います」

台所に行き、先生は盆の上に、大福と緑茶を入れた湯のみを置いた。

「持っていけますか？」

じっと見ていたからか、先生が聞いてくる。

俺はすぐに頷き、先生と一緒に部屋に戻った。

「気分はどうですか？」

先生は少女の近くに座って訊いた。

「あ…、大丈夫…です」

先生と、及川刹那と名乗った少女が話している間、俺と銀時は睨み合っていた。

部屋に入った時に、些細なことで言い争いをしたから……。

「ここにいればいいじゃん」

先生が刹那に、行く宛が無いなら、私塾（こく）にいたらどうかと訊くと、銀時も勧めていた。

「刹那が決めることだろう。おまえは、口出しするな」

そう言いながら、ツラは銀時を叩いていた。

「私は……」

刹那は迷っているようだった。
と、俺と少し目があつた。

（あれ？さっきは何とも思わなかったのに。…こいつ、可愛い…！
！）

咄嗟に目を逸らす。

その直後に、刹那は私塾にいることを決めた。

「それから、俺達は一緒に過ごすことが多くなった」

「そうなんですか…。何か最後、高杉さんが及川さんに一目惚れした感じでしたけど……」

「あア、初恋兼一目惚れだった」

さらりと言う高杉に、新八達はやや引いた。

「最初の頃はぎこちなかったけど、私も銀時さんも、変わっていった……」

失くしたと思っていた、人間らしい感情が甦り、松陽がいて、本当に良かったと思う。

「ずっと、先生と一緒に過ごしていくと思ってた」

刹那の口調が重くなり、桂と高杉も表情が曇る。

「別れは、いつかは来る。だが、『あれ』は突然過ぎた」
間を開けて、桂は咳くように言った。

第13話 出逢いと始まり（後書き）

刹那との出会いは、『神氷空』と一緒にです。
目線を刹那にしていなかったのですが。

第14話 重なる悲劇

一緒に過ごすようになって、銀時はよく笑ったりするようになり、刹那も敬語で話さなくなった。

その後、刹那の誕生日を祝ったり、季節の行事を一緒にしたりと、いろんなことがあった。

「もうすぐだよ」

先生の誕生日の前日、俺達は刹那の案内で、山に花を摘みに行った。

「何で朝早くから行くんだよ……」

眠そうにしながら、銀時がぼやく。

「昨日行った時、まだ半分位しか咲いてなかったけど、今日は全部咲いてると思うの！」

前を歩く刹那は、楽しそうに言った。

しばらくして、刹那の言っていた花畑に着いたが、本当に半分程しか咲いていなかった。

「半分位しか咲いてねーじゃん」

「咲かなかったか……」

太陽が昇り、朝日が花畑に降り注いだ。まさにその時だった。

「うわぁ……」

花が一斉に開き、辺りは赤い絨毯を敷いたようになった。
朝日の中を、花は風に揺れている。

「綺麗だな」

銀時が呟くと、俺達は頷いた。

咲いたばかりの赤い花は、とても美しかった。

「早速摘もう。先生、きっと喜んでくれるよ！」

俺達は花を摘み始めた。

前日に喧嘩をした銀時と高杉は、競い合うように摘んでいく。

「いてっ！」

花を摘んでいると、高杉が声を上げた。

「どうした？」

「葉っぱで、手エ切っちゃった」

見ると、右の手のひらに斜めに裂けた傷があり、血が出ている。

「そんなに深く切ってないみたいね」

刹那は、持っていたハンカチを高杉の手に巻いた。

「これで大丈夫だよ！」

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして！」

顔を赤くして、高杉が礼を言つと、刹那は微笑んで言った。

昼頃には、沢山の花を摘み、そろそろ帰ろうと思った時だった。

「髪飾り、どっかに落としちゃった…」

見ると、刹那がいつも付けている、赤い花の髪飾りが無い。

「探すの手伝おうか？」

俺が訊くと、刹那は首を振って、自分で見つけるから、俺達は先に
行っていていいと言った。

「見つかったら、すぐ追い掛けるよ」

そう言った刹那を残し、俺達は花畑を後にした。

「これだけあれば、先生喜んでくれるな！」

「そうだな！」

花を抱え、高杉が言い、俺も頷く。

刹那のおかげで、沢山の花を摘むことが出来た。

「刹那は、まだ来てないな」

銀時は振り返るが、刹那の姿はなかった。
前を見た時、声が聞こえた。

「みんなーっ！」

「あ、刹那が来た」

俺は振り返り、刹那の近くに行った。

「髪飾り、見つかったのか」

そう聞いた時だった。

「危ない！」

刹那が叫び、上を見ると、岩が幾つも落ちて来るのが見えた。

「うわっ…!!」

やがて、岩は全て落下し、辺りに土煙が舞った。

「ツラア、大丈夫かア？」

高杉が、足を引きずりながらやって来る。
銀時は頭から血が出ている。

「俺は大丈夫だ。おい、刹那……」

そばにいた筈の刹那を見て、俺達は息を呑んだ。

「刹那!？」

「及川!しつかりしろよ!！」

刹那は頭から血を流し、ぐったりとしていた。

「え!？及川さん、どうなっちゃったんですか!？」

「死んじゃってなんかないよナ!？」

「死んでないだろ。じゃあ、目の前にいる刹那は何だ!？」

白哉に言われ、2人は「そうだ」、と気付く。

「その時私は、打ち所が悪かったせいで、何日か意識不明だったの」

「それだけでも、大変なことだった。が、その事故から、僅か数日で、忘れもしない日が来た!！」

ややつらそうな表情をし、桂は続きを話した。

刹那の怪我は軽かったが、打ち所が悪かったのか、なかなか目を覚まさない。

「刹那…、目エ覚まसानーな…」

銀時は振り返り、部屋で寝かされている刹那を見る。
頭と右手首には包帯が、顔に絆創膏が張られた姿は、痛々しかった。

「2日も経ったのにな…」

咳く高杉は、右足を捻挫、俺は擦り傷と左腕を打撲。
銀時は頭を切ったらしく、刹那と同じように包帯をしている。

「あ、月………」

廊下にいた俺達は、銀時の咳きを聞いて、空を見た。
空には、楕円形に近い月が出ていた。

「もうすぐ、満月だな…」

涼しくなり、刹那はこの時期の満月を見るのが楽しみだった。

「それまでに、目を覚ますといいな」

「ああ………」

それから数日が経った夕方に、俺とツラは刹那の様子を見て帰る途中にいた。

「今日は満月だというのに、やはり刹那は目を覚まさなかったな」

怪我は治ったが、刹那は目を覚まさない。

心なしか、身体は少し痩せ、顔色も青白かった。

「何とか目を」

「ツラ、月が出てる」

声を掛け、一緒に月を眺めた。

だが、その月は血のように深く赤い色をしている。

「赤い満月か…。縁起が悪いな」

ツラは呟き、何故か俺は、胸騒ぎがしていた。

「なあ、ツラ…」

声を掛けた時、遠く向こうから、何処かで聞いた泣き声のような悲鳴がした。

「今の声…、銀時か？」

「行ってみるぞ！」

俺達は走り、私塾へ急いだ。

「！煙…！？」

近くに行くと、学舎のあちこちから、煙が立ち登っていた。

「火事…！？」

「高杉、先生と銀時を見てきてくれ！俺は、刹那を見てくる…！」

「ツラ！」

呼び止める間も無く、ツラは中に走って行く。
俺も後を追い、中に入り、廊下を走った。

「血の…匂い」

廊下の角を曲がった時、血の匂いがした。

嫌な予感を消すように首を振り、俺は匂いを辿って、先生の部屋に
行った。

「先生！銀時！」

部屋に入った時、俺は状況を呑み込めなかった。

「先…生…？銀時…？」

先生は血だらけで倒れ、銀時は先生からもらった刀を抜き、あちこ
ちから血を流していた。

「まだガキがいたのか」

低い声のした方を見ると、編み笠を被った黒装束の男が立っていた。

「おまえ…」

男の声と、手にしている血刀を見て、冷や汗が吹き出た。

（こいつ、ヤバい…！！）

すぐに逃げ出したかったが、足が震え、動くことが出来ない。

「…銀時、晋助…！早く、逃げ…なさい…！」

倒れていた先生が起き上がり、必死に言った。
その声に、俺は我に返った。

「先生…！」

「早く…。ここは、私が何とかします。だから…、2人は刹那を連れて、逃げなさい…！」

「嫌だ…！俺も戦う…！」

「お、俺も…！」

銀時と俺が叫ぶと、先生は首を振った。

「駄目…です。あなた達では、黒夜叉には勝てない」

「黒…夜叉？」

銀時が呟いた時、天井が落ちてきた。
火が近くまで迫って来ていた。

「逃げるのなら、逃げればいい。そいつは、もう助からないがな」

黒夜叉は不気味に笑い、去って行った。

「待て！」

追い掛けようとした時、先生は倒れ込んだ。

「先生！しっかりして！！」

「私は…、もう助かりません。ここで、お別れです」

俺達は目を見開いた。

先生は、何を言っているんだ？

「あなた達は、生きて…。生きて、己の信じる…道を行きなさい…」

「何…言っただよ、先生！俺は、俺らは、まだ何もしていない！何も…返せてない……」

先生からもらった、沢山の恩を返せていない。
なのに、それを拒むように、私塾を燃やす炎は全てを奪い去ろうとする。

「もう…、返してもらっています」

不意に、俺達は外に突き飛ばされた。

「先生！！」

部屋に戻ろうとするが、炎に行く手を阻まれる。

「銀時、高杉！」

寝間着姿の刹那を背負ったヅラが、こちらにやって来た。

「先生は!？」

俺達は答えられず、ただ涙を流した。

「そんな……。嘘、だろう……」

状況が分かったのか、ヅラは呆然と呟く。

「……ん」

燃え盛る私塾を見つめていた時に、刹那は目を覚まし、その光景だけ、全てを悟ったらしい。

第14話 重なる悲劇（後書き）

神氷空から見て、次元を征く者と分岐した話になりました。

その為、4人の怪我が異なります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031y/>

リライト ~ 紅く染まった花 ~

2011年12月26日23時52分発行